

## 巻頭言

# 生き残るために

西条中央病院 院長

高田 泰治

『最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるでもない。唯一生き残るのは、変化できる者である』チャールズ・ダーウィンの「種の起源」から正しく引用された言葉かどうかは別にして、企業のみならず病院の運営においても示唆に富む名言と思います。平成12年6月に私は院長職に就きましたが、以来、医療状況が急激に変化してきました。バブル崩壊後、長引く不況のなかで、平成13年に成立した小泉内閣は「聖域なき構造改革」のスローガンのもとに、その改革の1つとして医療費抑制政策を実施してきました。さらに平成16年4月から始まった医師卒後臨床研修の義務化を発端として、極端な医師の偏在が始まり、今もなお地方の病院における医師不足が続いています。このように環境が激変するなかで、地方の中小病院は変化に適応しなければ生き残ることができないという状況が続いてきました。

私が院長になってから9年の間に西条中央病院の経営母体である医療法人を二度も変更しました。当院は昭和29年に「財団法人倉敷中央病院の分院」として設立され、昭和59年に「医療法人」として独立しました。その後、平成18年に「特定医療法人」に移行し、さらに平成21年12月に「社会医療法人」に変更しました。当院は創立以来、市民病院的な役割を果たしてきましたので、これで名実ともに公共性、公益性の高い病院になりました。社会医療法人は法人税、固定資産税もすべて無税となります。西条市には社会福祉法人済生会西条病院、社会医療法人村上記念病院、西条市立周桑病院などの急性期病院がありますが、全て税負担のない病院です。当院の社会医療法人への移行は、これらの病院と対等に競争をするために、いわば生き残りを賭けた必要不可欠な変化であったと思っています。

病院の健全な運営のために他にもいろいろな取り組みをしてきました。まず平成13年5月には通所リハビリテーションを新築し、新たに介護保険事業に取り組みました。

平成13年11月に病院機能評価の審査を受け、これによって病院の組織体系や管理面での大幅な変更、改善を行いました。平成15年3月には健診バスによる移動健診を開始し、院内保育所を増築しました。平成18年3月には診療機能向上のためにフルオーダーシステム、画像システムを導入しました。平成18年4月に産婦人科医が減り、やむを得ず産科を休止しましたが、余った産婦人科病棟は「レディースフロア」と名付けて女性専用の一般病棟に変えて使用しました。2年後、他県から産科医の紹介がありましたが、土日週休2日制の勤務条件を求められ、これを承諾して平成20年7月に奇跡的に産科を復活しました。当院は水、土曜午後休診の変則週休2日制でしたが、これを機会として他の勤務医の負担も軽減するために隔週土曜日を休日に変更しました。平成20年8月には透析・リハビリテーションセンター棟を新築すると同時に健康管理センターを改築しました。透析、リハビリテーション、そして健診の需要の増加に対応し、新たに小児のリハビリテーションにも取り組みました。

以上のように、病院が生き残るためにいろいろと知恵を絞って運営し、変化に対応してきましたが、医師不足については何ら対策がありません。

愛媛大学医学部は医師を養成し、この地域に医師を供給することが役割であると思いますが、医師不足のために医師派遣機能が果たせなくなっているのが現状です。どうすれば愛媛に医師が残り、地域の病院に適正な医師の配置ができるのか。例えば、愛媛大学の卒業生は2年間の基礎研修を全員愛媛大学病院で受けることにするのはどうでしょうか。基礎研修は義務なので医学教育を実質8年制とするものです。基礎研修を終えた後に自由に入局、後期研修、就職などの方向を選択してもらうことにします。これだけでも愛媛に残る医師は増えると思います。

卒業生全員の基礎研修を行うには愛媛大学病院の病床数が足りないので協力型病院がこれを分担します。これまでのように研修医の指導を協力型病院の勤務医に任せるのではなく、愛媛大学病院は新たに必要な臨床研修指導医を臨床教授として全国から公募します。臨床教授は愛媛大学病院に所属しますが、協力型病院が給料を出し、協力型病院において診療しながらローテートしてきた研修医の指導にあたります。臨床教授も1～2年程度でローテートし、大学病院で診療や研究をする期間を持つようにします。この制度ができれば大学から遠く離れた中小規模の協力型病院であっても、常に臨床教授と数名の研修医が来ますので実質的に医師を確保することができると思います。愛媛大学病院と協力型病院に優秀な臨床研修指導医を置いて、充実した魅力のある臨床研修を行い、1人でも多くの医師が愛媛大学と愛媛県に残るようにしてほしいと思います。医療崩壊を防ぐためにできるだけ早く何らかの制度の改革が必要だと思います。

## 学会記

## 第11回日中高血圧シンポジウム

榎本 大次郎

今年2009年10月30日～11月1日に北京で開催された第11回日中高血圧シンポジウムに参加してきました。小生にとっては初めての訪中ということで、やや浮かれ気味の旅程でありましたが、思いがけないアクシデントもあって忘れられない学会になりました。拙文で恐縮ですが、ここに学会記として紹介させていただきます。御目汚しとは思いますが、何卒御容赦の程をお願いします。

まずは今回参加した日中高血圧シンポジウムについて簡単に御説明させていただきます。日本と中国の高血圧研究の発展を目的に、愛媛大学名誉教授の日和田邦男先生と中国高血圧連盟会長の劉力生先生らの尽力により1998年から活動を開始しているカンファレンスです。日中両国が毎年交代で研究発表の場を設けており、昨年は札幌（日本



高血圧学会総会と合同開催）で行われました。日和田先生門下の我々としては非常に縁のあるシンポジウムといえます。本年は国際高血圧連盟25周年と中国高血圧連盟20周年にあたり、World Hypertension Congress 2009と称した記念大会が北京で催される運びとなり、第11回となる日中高血圧シンポジウムも合同開催されました。

今回のシンポジウムには小生の他にも三好賢一先生と倉田美恵先生が演者として参加しており、大蔵隆文先生に出発から帰国まで同行していただけたので大変に心強い旅路となりました。なにしろ小生自身にとっては2回目の国際学会参加となるのですが、前回は国内で開催された国際高血圧学会（ISH）でしたので、都合の分からない国際路線（特に中国）で迷うこと必至の状況であったのです。ともあれ、10月30日に福岡空港から北京に向けて出発しました。チンタオ経由の便であったため、約3時間のフライトでチンタオ空港に到着、入国手続を終えてから、更に3時間のフライトを経て北京入りしました（チンタオ空港スタッフのあまりに不親切な先導と汚れた空気になんとなく中国を感じつつ）。到着した北京は生憎の雨模様で日本よりも肌寒い天候で



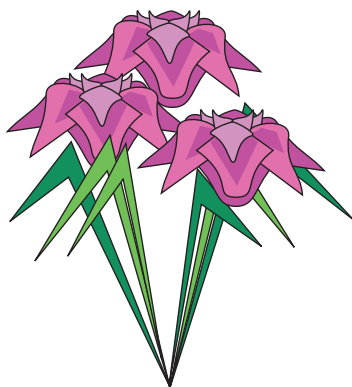
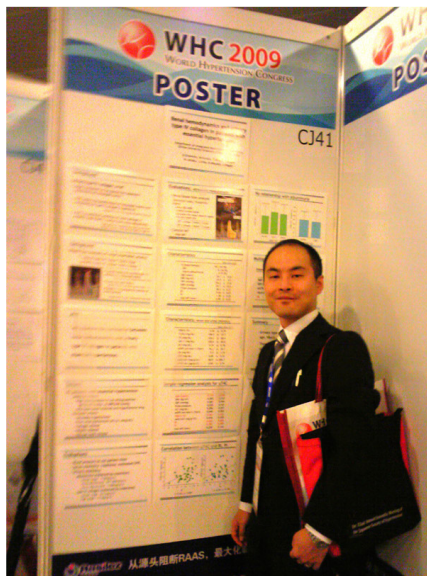
した。何も考えず防寒着を準備してこなかったのを不安に感じつつ、この日は既に夜半でしたので、現地ホテルに直行しました。ホテル内のレストランで夕食（北京ダック美味しかったです）を摂り、明日に向けての英気を養いました。明けて発表当日、シンポジウムが午後からの開催であったため、午前中に紫禁城を散策してから会場入りすることになりました。晴天に恵まれ、前日は見えなかった中国の広大な首都風景（天安門広場やオリンピックスタジアムが良く見えました）を満喫しながらの移動。最短コースで紫禁城・故宮博物館の散策しましたが、中国四千年の歴史に十分触れることができました。薄着のため寒かったのですが、気分が熱く盛り上がってきたところで学会会場に到着しました。



今回、ポスターセッションでの発表でしたので、展示をしてから口頭演題を拝聴していると（頭の中は自分の発表ことで精一杯）、あっという間にセッションの時間となりました。御想像に易いと思いますが、英語に全く自信の無い小生にとっては最も緊張する瞬間です。展示ボードが日本演題と中国演題に分かれていたのですが、驚くことに中国側のボードが半分ほどしか展示されていないままセッション開始。第2内科からの演者3人が連続してプレゼンする流れで、小生がトップバッターを切りました。Chairpersonは、足達寿先生（Japan）とXiaowei Yan先生（China）に務めて頂きました。いざとなると、用意した原稿の半分ほどしか上手く伝えることができない自分のプレゼン能力にあたふたしながら、なんとか終了。高血圧性腎障害と尿中パラメータについてのプレゼンをしたのですが、中国での腎不全診療は日本とかなり違うらしく、Xiaowei先生からは「これほど腎不全早期から尿中の腎障害マーカーが上昇するのは信じられない」との感想を頂きました。世界的には慢性腎臓病（CKD）に対する早期診療が活発化してきていますが、中国ではまだ一般的ではないのかも知れません。以前、中国人留学生のIgA腎症を診療した際に、将来的には腎移植大国である中国で移植を受ける予定となり帰国していったことを思い出しました。それにしてもXiaowei先生の中国語イントロネーションの英語がとても印象的でした。三好先生、倉田先生とも笑顔で質問に答えながらプレゼンを熟しており、流石だなあと感嘆しつつセッションは終わりました（自分のプレゼンが終わってすっかり弛緩した状態でしたが）。終了後にそれぞれのポスター前で記念撮影をして、気分よく会場を後にしました。この日の

夕食は北京名物のしゃぶしゃぶ（ビーフ&ラム肉）を食し、明日の早朝に帰国が控えているため早々にホテルに戻りました。

最終日、帰国のため早朝の出発でしたが、小生は寝過ごしてしまったため起床のコールで慌しく身支度を整えて空港へ。まだ暗い北京市内は恐ろしく冷え込んでおり、降雪に見舞われていました。現地のガイドさんからは特にあせった雰囲気も感じられず油断していたのでしょうか、なんと北京空港の滑走路は全面凍結。小生たち4人は滑走路路上の航空機内で約6時間カンヅメ状態となってしまったのです。機内では少しずつ不満を出し始める中国人の方たちを横目に青島ビールを飲みまくる自分がいました。その後、何とか離陸したものの福岡空港に到着したのが夜9時頃となり、その日のうちに松山まで戻ることはできませんでした。予定外の博多の夜は屋台で楽しむこととなりまして、翌日の便で松山に戻りました。全体的には時間に余裕のない行程でしたが、初めて体験することが多く、楽しい思い出となりました（寝坊したために換金できずに持ち帰った人民元は良い思い出の品です）。今後も国際学会でなるべく優れた発表する機会が増えるように、頑張っていきたいと思っております。帰国が遅れたため、バイト先の先生方には大変ご迷惑をおかけしてしまった事を深謝しつつ筆を置かせて頂きます。



## 学会記

## American Heart Association (AHA) Scientific Sessions 2009

愛媛大学大学院病態情報内科学 西村和久

今年も行ってきました、世界最大の循環器領域の学会であるAmerican Heart Association (AHA)。2009年は11月14日から18日までフロリダ州はオーランドで開催されました。採択率30%程度の狭き門ですが、私は幸運にも2006年のシカゴから4年連続で発表の機会に恵まれています。今年は第二内科関連から計7題の臨床研究が採択され、先発隊として大木元先生、井上先生、私、稲葉先生が13日に、松山済生会病院の重見先生の結婚式のため、檜垣教授、岡山先生、佐々木先生が1日遅れでオーランド入りしました。先発隊はいきなり出発の時点で羽田行きの飛行機が1時間30分も遅れるというハプニングのため、成田発シカゴ行き国際線に間に合うのか？とかなり焦りましたが、本当にギリで17時55分発の飛行機に間に合い、オーランドに無事予定通り到着しました。オーランドは11月でも暖かく、むしろ少し暑く感じました。到着日の夜は軽く軽食で済ませようとみんなで食事に出かけましたが、結局初日から plaque rupture を起こしそうなステーキをがっつり食べてしまいました。翌日日曜からAHAの1日目スタートしました。今年のAHAは全体的に出席者も例年に比べると少なく感じられ、また著名人によるlectureが少なく、企業展示も縮小傾向でした。コンgresバックも今年からエコバックのようなもので、ネームカードもregistrationでプリントアウト、ストラップもバックに入っていませんでした。米国の不景気的一端を垣間見た感じがしたのは私だけでしょうか？また、いつものことですがこのOrange County Convention Centerは異常に寒い！半袖の人も見かけられ、欧米人はやっぱり皮下脂肪が厚いと思えません。初日は井上先生が口火を切って心エコーのセッション Echocardiography: Novel Techniques for the Assessment of Diastolic Function で発表、座長はMayo clinicのDr. JK Ohとオスロ大学のDr. Otto Smisethで、いずれも世界の心エコー界の重鎮です。質疑応答を難なくこなしている井上先生はさすがでした。一日遅れでその日の夜到着した岡山先生に私の部屋で発表の最終チェックをしてもらい、明日に備えました。2日日月曜日は“Echocardiography in the Evaluation of Systolic Function-Mechanistic Insights Through Strain and Evaluation of Dyssynchrony”というセッションに日本から2題、とういかに愛媛大学から私と井上先生の2題が採択されており、自分たちが積み重ねてきた努力が報われる感じがし、同時に誇りに思いました。





さらに座長の1人は、Cleveland clinicの有名なDr. JD Thomasでした。座長の質問やフロアからの質問に対してはかみ合っていないな、と歯痒い思いをしながら答えつつも、Dr. JD Thomasにフレンドリーにフォローしていただき無事終了しました。



この4年間、ポスター発表をしたことがなく、毎年発表直後だけ、もっともっと流暢に質疑応答が出来るようにトレーニングしなければ、と痛感している次第ですが、来年こそはと今年も思った次第であります。今年はセッションの最後に演題一つ一つのコメントがあり、私達のセッションのcommentaryはDr. T Abrahamでしたが、結構な辛口コメントを2人ともいただきました。去年までエコーチームでこれらの発表のデータ収集を手伝ってくれた、現在関連病院に出向している清家史靖先生を待っておりましたが、スペースシャトルの発射とセッションがかぶっており、そちらの方に行っていたとのこと、送別会ではJK Ohの「The Echo Manual」まで皆でプレゼントしたのに寂しい…。その日の夜は、檜垣教授をはじめ今回参加した全員が集合し、シーフードレストラン



での食事会でしたが、ロブスターにステーキ、ワインと、とても美味でした。翌日火曜日は、昨年から参加しているFunrun/Funwalkに大木元先生と参加しました。朝5時に起床し、学会会場の隣のシーワールドで午前6時過ぎにスタートしました。総勢800名に及ぶ大集団が一斉にスタートし、まだ開園

していないシーワールドの敷地内をくぐり抜けながら5kmを何とか走りきり先にゴールした大木元先生に出迎えて頂きました。我々は去年から参加していますが、このFunrun/Funwalkは今年で17回目を迎えており、多くの参加者から世界的な健康ブームがうかがわれました。またこの写真はオランダの朝焼けを撮ったものです。時差ぼけのため朝早くから起きており、外が少しずつ明るくなってきていましたので窓から外を眺めるときれいな朝焼けでしたので、思わずホテルの前に出て撮影しました。



以上今回のAHA2009に参加し、発表では肝を冷やしながらか、世界最先端の研究を目の当たりにすることができました。これもいつもご指導していただいている先生方のお陰であると思っております。来年もAHAで発表できるよう、さらに研究に精を出さないといけないと思いながら東海岸からの長い長い帰路につきました。

## 学会記

## European Respiratory Society (ERS) 2009

濱 口 直 彦

日本を旅立って14時間余り。濱田先生のhipに褥創ができそうになった頃、ようやくウィーンに降り立った。2度目の国際学会である。昨年、ベルリンで人生初の国際学会を経験し、質疑応答では語学力のなさにあえなく撃沈した。今年はoral presentationに選ばれており、ひとまずAEONに通いこっそり語学力に下駄をはかせて臨んだ。発表会場は、これまで経験したこともない大きな会場であった。下駄の効果は抜群で、presentationは無事終わった。リベンジを誓う質疑応答では、2つはなんとかクリア。最後に座長（ギリシャ人）から発せられた質問は全くもって聞き取れず、濱田先生に助けていただいた。さすがは、わがボス。ありがとうございました。

さて、無事発表は終わった。地はウィーン。普段はクラシックのクの字も聞かない私ではあるが、それなりに関心は向くものだ。ベートーベンやらモーツァルトやら、何やらよくわからないが、ひとまずオペラを鑑賞してみよう、という話になった。オペラ座の周囲には、モーツァルトがいた。いや、モーツァルトの髪型をしたダフ屋がいた。その愛すべきダフ屋は突然叫んだ。「OH! NA-O-HI-KO! オペラのチケットあるよ!!」???断じて知り合いではない。しかし彼は執拗に「NA-O-HI-KO!」と叫んでいた。私の胸元には学会用のname card。どうやら発音しやすいらしい。不信感を感じながらも、これも何かの縁と、結局私たち3人は彼から高額シートを約4割引きで購入した。題目は「魔笛」。神妙な面持ちで鑑賞を始めたものの、そこはやはり発表後の疲れもあって（ということを強調しておくが）、2幕目では夢の中へ…。帰国後、友人に魔笛のストーリーを得意げに話したが、パンフレットを観ながら、友人が一言。「パンフレットにあるあらすじとぜんぜん違うよ?」…。なぜだろう。それも一興。

なにはともあれ、今回の学会では、濱田先生に日々指導していただいた研究を世界に発表できるという貴重な経験をさせていただいた。課題という名の種はたくさん見つかった。今後、濱田先生とともに、呼吸器内科を盛り立てていくためのこの種を、大切に育てていける後輩たちが増えたらいいと切に願う。





奨励賞受賞のことば

## 第7回愛媛呼吸循環器病医学研究会

国立病院機構 愛媛病院 呼吸器 藤原 愛

第7回愛媛呼吸循環器病医学研究奨励賞を頂きました国立病院機構 愛媛病院 呼吸器科の藤原 愛です。このような賞をいただけるとは予想もしていなかったもので、本当に驚きました。今回私がテーマにしたのが肺抗酸菌症に対する外科的治療についての検討でした。平成21年の4月から愛媛病院に勤務しておりますが、ここで最初に受け持たせていただいたのが肺結核の患者様でした。4月1日の朝、アリの巣のような院内を紹介して頂いている最中、阿部先生から「早速なんだけどね、今から一人結核の入院があるから、お願いします。」という衝撃的な電話をいただき、慌てて結核の専門書を握って病棟に向かったものです。大学病院で結核に触れたことのなかった私は、そこで初めて結核の治療をしたのでした。それから半年ほど肺抗酸菌症を勉強していくうちに、肺抗酸菌症の内科的治療の限界、集学的医療の重要性を知るに至り、今回このようなテーマで研究させていただきました。大学病院などで新たな治療法の開発が日々研究されている一方で、我々臨床医にできることは、今ある治療方法の中で何が使えるか、広い視野と柔軟な発想を持って一人の患者様を救おうとすることだと痛感しました。

阿部先生をはじめ、愛媛病院の先生方には懇切丁寧にご指導を頂きました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。



## 研修医奨励賞受賞のことば

# 第101回日本内科学会四国地方会

飯尾 千春子

2009年11月22日に香川県高松市で開催された第101回日本内科学会四国地方会に参加しました。私は循環器の演題を発表させて頂き、研修医奨励賞を受賞することができました。

岡山参謀長が「獲りに行くぞ、奨励賞」と永井先生と私に指令を発したのは8月のことだったのでしょうか。その時は「獲りに行って獲れるんかいな」的な気持ちでしたが…

質疑応答では、とある先生からの質問に思わずのけぞってしまい、うまく切り抜けることが出来ず落ち込みました。しかし次の瞬間には「人事を尽くして天命を待つ」ような気持ちで、永井先生とうどんを食べに行きました。発表の緊張感から解き放たれて、お腹も心も温まるようなうどんのお味でした。

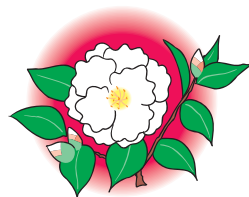
発表した研修医達がそわそわしていると、いきなり受賞者の一覧が掲示されました。私は怖くて見られなかったのですがそうこうしているうちに永井先生が「おめでとう」と声を掛けて下さいましたし、岡山参謀長も笑顔で握手して下さいました。

私はその瞬間が一番うれしかったです。

その日は永井先生のお誕生日でしたので、「オーベンにいいプレゼントが出来た！」とコベンとして思いました。

寿限無を唱えてるのか？というくらいになるまで練習し、永井先生にしっかりとご指導頂いた結果、バッチリ受賞できたのは何かほっとした、というのが正直な気持ちです。

この経験を糧に、今後も邁進していきます。



## 関連病院業績集

日和田邦男

日本文著書

〈分担執筆〉

1. 日和田邦男

レニン阻害薬

熊谷裕生、小室一成、堀内正嗣、森下竜一 編集

高血圧ナビゲーター（第2版）

メディカルレビュー社、東京、pp268-269, 2008.

2. 日和田邦男

左室肥大の改善と心房細動発症の低下—LIFE試験

萩原俊男 編集

日常臨床に役立つ高血圧診療のエビデンス

先端医学社、東京、pp46-47, 2008.

3. 日和田邦男

第6回総会の会況 pp36

第21回総会の会況 pp60-62

日中高血圧シンポジウムの歩み pp112-113

第3代編集長 1999～2002 pp128-129

日本高血圧学会30周年記念事業実行委員会 編集

日本高血圧学会30周年記念誌

メディカルレビュー社、大阪、2008.

日本文総説

1. 日和田邦男

大規模臨床試験 心疾患を合併する高血圧

LIFE, LIVE

日本臨牀（増刊号）：135-141, 2008.

その他

1. 日和田邦男

HOMED-BP研究の完成を待つ

HOMED-BP NEWS No.14：2-3, 2008.

2. 日和田邦男

Gold Life～素晴らしき哉、人生



Hypertension フォーカス No.22 : 13, 2008.

## 宇和島社会保険病院

1. 西川昭彦、植田美子、若山かおり、林 豊  
当院心疾患患者における水中運動療法の効果と健康関連QOLについて一室内運動療法との比較よりー。  
心臓リハビリテーション 13 : 135-138, 2008.

## 喜多医師会病院

### 英文原著論文

1. Makoto Saito, Hideki Okayama, Kazuhisa Nishimura, Akiyoshi Ogimoto, Tomoaki Ohtsuka, Katsuji Inoue, Go Hiasa, Takumi Sumimoto, Jitsuo Higaki.  
Possible link between Large Artery Stiffness and Coronary Flow Velocity Reserve.  
Heart. 94 : e20, 2008.

### 日本文原著論文

1. 齋藤 実、岡山英樹、西村和久、大木元明義、大塚知明、井上勝次、日浅 豪、住元 巧、檜垣實男  
動脈スティフネスー冠血流予備能連関の検討  
Arterial stiffness 14 : 102-103, 2008.

### 日本文症例報告

1. 飛田 文、土手健太郎、矢野雅起、長櫓 巧、齋藤 実、岡山英樹  
PCPS下の血栓吸引術で救命した右房内血栓を伴う急性肺動脈血栓塞栓症の1例  
蘇生 7 : 63-66, 2008.

## 県立今治病院

### 英文原著論文

1. Michinobu Nagao, Hiroshi Higashino, Hiroshi Matsuoka, Hideo

Kawakami, Teruhito Mochizuki, Kenya Murase, Masahiko Uemura, Tamami Kouno.

Clinical Importance of Microvascular Obstruction on Contrast-Enhanced MRI in Reperfused Acute Myocardial Infarction.

Circulation Journal 72 : 200-204, 2008.

#### 日本文原著論文

##### 1. 松岡 宏

恒久的ペースメーカー植え込み術における工夫とコツー“cut-down変法”を中心にー。  
愛媛医学 27 : 23-29, 2008.

#### 総説

##### 1. 松岡 宏、川上秀生、河野珠美、重見 晋、伊藤武俊

イメージングで診る、SVGおよびvein graft diseaseの特徴  
心臓血管画像MOOK, 104-109, 2008.

## ■ 県立南宇和病院

##### 1. 風谷幸男

県立南宇和病院の実情と課題

南宇和郡医師会報 29 : 7-8, 2008.

## ■ 国立病院機構愛媛病院

#### 英文症例報告

1. Jun-ichi Funada, Makoto Saito, Akira Fujii, Hidetoshi Hashida, Akira Kurata, Hideki Okayama. Usefulness of Coronary Flow Analyses by transthoracic Doppler Echocardiography After Percutaneous Coronary Intervention for Ostial Stenoses due to Takayasu's Arteritis : A Case Report.

Japanese Journal of Interventional Cardiology 23 : 436-441, 2008.

#### 日本文原著論文

1. 井上義一、北市正則、審良正則、蛇澤 晶、山鳥一郎、山本 暁、新井 徹、望月吉郎、佐藤利雄、藤田結花、永田忍彦、赤川志のぶ、齊藤泰明、丸山倫夫、斎藤武文、江田良輔、阿部聖裕、北田清悟、福島一雄、横崎恭之、小橋陽一郎、林 清

二、福田 悠、西村一孝、坂谷光則

線維化性特発性間質性肺炎患者の臨床経過に及ぼす治療効果（第2報）

－国立病院機構政策医療ネットワーク共同研究－

「特発性肺線維症の予後改善を目指したサイクロスポリン＋ステロイド療法ならびに  
Nアセチルシステイン吸入療法に関する臨床研究（工藤班）」

平成19年度研究報告書 42-46, 2008.

#### 日本文症例報告

1. 戸井孝行、伊東亮治、濱田泰伸、酒井希美子、濱口直彦、門脇 徹、三好誠吾、  
檜垣實男、阿部聖裕

間質性肺炎を経過観察中に診断したmyeloperoxidase anti-neutrophil cytoplasmic  
antibody (MPO-ANCA) 関連血管炎の1例

日本内科学会雑誌 97 : 105-108, 2008.

## 国立病院機構近畿中央胸部疾患センター

#### 英文原著論文

1. Inoue Y, Trapnell BC, Tazawa R, Arai T, Takada T, Hizawa N, Kasahara Y, Tatsumi K, Hojo M, Ichihata T, Tanaka N, Yamaguchi E, Eda R, Oishi K, Tsuchihashi Y, Kaneko C, Nukiwa T, Sakatani M, Krischer JP, Nakata K.

Japanese Center of the Rare Lung Diseases Consortium. Characteristics of a large cohort of patients with Autoimmune pulmonary Alveolar proteinosis in Japan.

Am J Respir Crit Care Med 177 : 752-62, 2008.

2. Young L, Inoue Y, McCormack FX.

Diagnostic potential of serum VEGF-D for lymphangiomyomatosis.

N Engl J Med 358:199-200, 2008.

#### 英文症例報告

1. Arai T, Inoue Y, Eishi Y, Yamamoto S, Sakatani M.

Propionibacterium Acnes in Granulomas of a patient with necrotising sarcoid granulomatosis. Thorax 3 : 90-91, 2008.

#### 日本文著書

〈分担執筆〉

1. 井上義一



治療薬剤：(1) ステロイド剤・免疫抑制薬。

新しい診断と治療のABC55/呼吸器7 特発性肺線維症。

最新医学別冊 pp113-120, 最新医学社、2008.

2. 北市正則、玉舎学、杉本親寿、大塚淳司、新井 徹、井上義一、林 清二  
病理一特発性肺線維症 (IPF) の臨床経過、画像所見と整合性のある病理診断は可能  
かをめぐる

新しい診断と治療のABC55/呼吸器7 特発性肺線維症。

最新医学別冊 pp25-32, 最新医学社、2008

3. 井上義一、山田佳子。

C. BAL法の手技：1. 洗浄液の採取. 気管支肺胞洗浄〔BAL〕法の手引き

P. 8～P. 10

2. 回収洗浄液の処理. 気管支肺胞洗浄〔BAL〕法の手引き

P. 11

3. 細胞数算定. 気管支肺胞洗浄〔BAL〕法の手引き P. 11

日本呼吸器学会びまん性肺疾患学術部会

厚生労働省難治性疾患克服研究事業びまん性肺疾患調査研究班

克誠堂出版、東京、2008.

4. 井上義一

じん肺. 第XI章 各種疾患の気管支鏡所見 11. pp226-228

肺胞蛋白症. 第XI章 各種疾患の気管支鏡所見 17. pp240-245

気管支鏡一臨床医のためのテクニックと画像診断 第2版 医学書院、2008.

5. 新井 徹、井上義一

アミロイドーシスとWegener肉芽腫症. 第XI章 各種疾患の気管支鏡所見 8.

気管支鏡一臨床医のためのテクニックと画像診断 第2版 pp218-221, 医学書院、2008.

6. 井上義一

肺砲たんぱく症 pp1315

肺ランゲルハンス細胞組織球症 (肺好酸球性肉芽腫症、ヒストオサイトーシスX)

pp1316

リンパ脈管筋腫症 (肺リンパ脈管筋腫症) pp1316-1317

グッドパスチャー症候群 pp1318

肺アミロイドーシス pp1318-1319

肺胞微石症 pp1319

ホームメディカ新版 家庭医学大辞典、小学館、2008.

7. 井上義一、新井 徹、審良正則、北市正則

非特異性間質性肺炎

別冊 日本臨牀 新領域別症候群シリーズ No.8

日本臨牀社 pp3-7, 2008.

8. 井上義一

肺胞蛋白症 pulmonary alveolar proteinosis (PAP).

今日の治療指針

医学書院 pp228-229, 2008.

総説

1. 新井 徹、井上義一、北市正則

〔特集〕 過敏性肺炎とその周辺疾患. さまざまな過敏性肺炎. 1) 夏型過敏性肺炎.  
呼吸器科 13: 404-411, 2008.

2. 井上義一

診断と治療のガイドライン—現行の問題点と展望  
呼吸器科 14: 81-88, 2008.

3. 井上義一

まれなびまん性肺疾患 呼吸器疾患診療マニュアル  
日本医師会雑誌 137: 240-242 2008.

その他

1. 林田美江、久保恵嗣、瀬山邦明、熊坂利夫、井上義一、北市正則、審良正則  
リンパ脈管筋腫症lymphangiomyomatosis (LAM) の診断基準

日本呼吸器学会雑誌 46: 425-427, 2008.

2. 林田美江、藤本圭作、久保恵嗣、瀬山邦明、井上義一

リンパ脈管筋腫症lymphangiomyomatosis (LAM) の治療と管理の手引き  
日本呼吸器学会雑誌. 46: 428-431, 2008.

3. 井上義一

薬剤性肺障害をいかに防ぐか

呼吸器NEWS&VIEWS 33: 3-7, 2008.

 佐藤循環器科内科

症例報告

1. Rieko Eriguchi, Junko Umakoshi, Yoshihiro Tominaga, Yuzuru Sato.

Successful Treatment of Inoperable Recurrent Secondary Hyperparathyroidism with Cinacalcet HCl

Nephrology Dialysis Transplantation Plus 4: 218-220, 2008.

## 市立宇和島病院

### 和文原著論文

1. 濱田希臣、成田美紀、泉 直樹、山根健一、大島弘世、石橋 堅、大島清孝、池田俊太郎  
高血圧性心不全発症患者の左室リモデリングの特徴  
血圧 15：86-87, 2008.

### 和文症例報告

1. 石橋 堅、池田俊太郎、山根健一、大島弘世、青野 潤、大島清孝、濱田希臣  
非特異的壁運動異常を呈した、ストレス誘発性心筋症の1例  
南予医学雑誌 9：58-65, 2008.
2. 大島弘世、池田俊太郎、山根健一、泉 直樹、石橋 堅、大島清孝、濱田希臣  
心室中隔穿孔を合併した下壁心筋梗塞の1例  
南予医学雑誌 9：66-71, 2008.

### 日本文著書

1. 濱田希臣  
心室中隔閉塞性心筋症「循環器症候群（Ⅲ）」  
別冊日本臨床（日本臨床社） 50-55, 2008.
2. 濱田希臣  
肥大型心筋症  
治療：(1) 薬物治療「新しい診断と治療ABC 58：心筋症」  
（松崎益徳 編集）  
別冊最新医学（最新医学社） 67-74, 2008.

### 総説

1. 濱田希臣  
心臓病のすべて－心筋症－  
からだの科学 257：108-112, 2008.
2. 濱田希臣  
肥大型心筋症治療の現状－予後に占める心不全の重要性について－  
Mebio 25：86-93, 2008.
3. 濱田希臣  
肥大型心筋症の薬物治療の進歩－Na<sup>+</sup>チャンネル遮断薬とHCMの予後－  
医学のあゆみ 226：88-92, 2008.
4. 濱田希臣

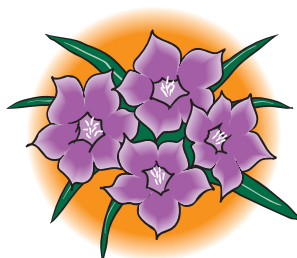


「診療ガイドダイジェスト」－心筋症－  
治療（臨時増刊号） 90：40-41, 2008.

## 松山赤十字病院

村上一雄

脂質異常患者におけるアトルバスタチンの尿中アルブミン排泄への影響  
Hypertension Forum 10：19-21, 2008.



## 新入医局員

[自己紹介文]

### 川上大志

はじめまして。今年度から伝統ある愛媛大学第二内科へ入局させていただきました、川上大志と申します。この場をお借りしまして新入局のご挨拶をさせていただきます。

私は愛媛県旧伊予三島、今の四国中央市に生まれました。新居浜西高校を卒業し、高知医科大学（現在は合併し高知大学医学部です）へ進みました。卒業時母校に残るという考えもありましたが、やはり故郷で働きたいと思い、研修先を愛媛に決めました。しかし、生まれ故郷とはいえ、愛媛の医療について全くの無知でありましたので、研修1年目は大学でお世話になることに決めました。研修していく中で第二内科の先生方にとってもお世話になり、自分の中でも特に循環器内科への興味が日増しに大きくなっていきました。2年目は県立中央病院で研修させていただきました。大学とは違った環境で研修をしましたが、やはり循環器をやりたいと決心し、3年目の4月から入局し、現在大学で研鑽を積んでおります。同期入局は呼吸器内科を選択した白石幸子先生だけであり、循環器は自分だけです。年齢の近い先生といっても10年目専門医となってしまう状況であり、少しさみしい思いがあります。昨今の研修制度の影響がこんなところに及んでいるのかと、今の研修制度で研修した身ながらしみじみと感じます。しかし、発想を変えれば自分の修行にはこれ以上ない環境でした。若手は自分だけですので、ありとあらゆる症例、手技を勉強できます。しかも、ご指導くださるのは各分野のスペシャリストの先生です。非常に恵まれた環境で働いております。一日も早く独り立ちできるようになることが現在の目標です。また、せっかく大学で働いているのですから積極的に学生、研修医と交流し、第二内科に興味を持ってもらうようにすることが、もう一つの大きな仕事と考えております。こちらの方は悪戦苦闘の連続であり、積極的に勧誘すると引かれてしまい、消極的だと見向きもされません。難しい課題ですが、一人でも多くの研修医、学生が第二内科に興味を持ってくれるよう、引き続き努力していこうと思います。

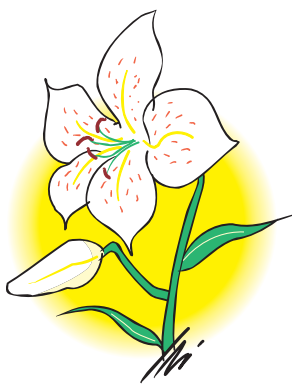
最後になりましたが、檜垣先生はじめ諸先生方の御導きで第二内科の一員となることができました。このすばらしいご縁に感謝申し上げます。今後は少しでも第二内科、さらには愛媛、日本の医療に貢献できるよう日々精進していきますので、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

## 白石幸子

本年度より、第二内科呼吸器グループの一員として日々学ばせていただいております。檜垣教授と同じ今治西高校を卒業し、大分医科大学で6年間学び、地元愛媛の地で研修をスタートさせてから3年が経ちました。幼い頃から中耳炎を繰り返し、お世話になった先生に憧れて医学の道を目指しました。学生の頃は漠然と、自分も耳鼻咽喉科医になって恩返しがしたいとか、生命の誕生に立ち会いたいから産科に進みたいなどと思っていましたが、研修をしている間に内科の持つ魅力にはまり、呼吸器疾患の奥の深さに触れ、いつの間にか呼吸器内科の戸をたたいていました。

呼吸器グループの一員となって8ヶ月が経とうとしています。呼吸器グループの先生方にはおひとりおひとりそれぞれの暖かさがあって、その診療スタイルも本当におひとりおひとりで異なります。循環器疾患や腎臓・高血圧疾患とはまた違った特性のある呼吸器疾患と、長く熱く向き合ってこられた先生方がそれぞれに築きあげられたその暖かさや診療スタイルそのものが、日々とても勉強になります。ともすれば目先のことで頭がいっぱいになり暴走しがちな私を、いつも暖かく、時には厳しく指導してくださる先生方に感謝しています。教科書からだけでなく、檜垣先生率いるこの魅力あふれる第二内科であればこそ学べることを、これからもしっかりと学ばせていただけたらと思います。

まだまだ内科医として、そして人間としても未熟であり、ときに謙虚さを忘れがちになったり失敗やご迷惑をおかけしたりしている毎日ですが、今後ご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。



## 結婚しました!

- ・長尾知明・智香子 2009年5月9日結婚
- ・榎本大次郎・知美 2008年4月8日結婚
  
- ・重見 晋・沙織 2009年11月14日結婚



結婚日：2009年11月14日

式場・披露宴会場：道後山の手ホテル

コメント：11月14日に道後山の手ホテルにて結婚しました。檜垣教授には結婚披露宴でご挨拶を頂き、一生の思い出に残る一日となりました。これからはお互いに慈しみ合いながら、頑張っていきたいと思います。まだまだ未熟な二人ですが、今後とも、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

## 生まれました!



2009年7月7日に次女真優（まゆ）が生まれました。（写真左は長女実優（みゆ：1歳）です。）二人とも名前のごとく優しい子に育ってくださることを願っています。

同窓会員の先生方、娘ともども今後とも宜しくお願い致します。

愛媛大学大学院 病態情報内科学  
青野 潤



名前：川上 まりあ（平成21年10月19日生）  
一言：44歳で第3子が生まれました。まだまだ働き続けなくてははいけません。開業医部会の諸先生方、20年後は宜しく御願ひ致します。

愛媛県立今治病院 循環器科  
川上 秀生



“こうたくん いえることばは あんぱんまん”  
稲葉 孝太（平成20年11月4日生）、夫ともども嫁から教育中…無理だけど

愛媛大学大学院病態情報内科学  
稲葉 慎二



（敬称略）

## 編 集 後 記

新政権の誕生、スポーツ界の新記録、新型インフルエンザの流行、裁判员制度・エコポイント等の新制度の誕生があったことから、2009年の漢字として「新」が選ばれたようです。今回の同窓会ニュースでは、「生まれました」「結婚しました」の新コーナーを設けました。「お宝拝見」・「おじゃまします」などの新企画についても御投稿・取材依頼等をお待ちしておりますのでよろしくお願い申し上げます。

広報委員 大木元明義、濱田 泰伸、岩田 猛